吉田健一著作集

補巻 I

# 劍橋の學生生活他

集英社

吉田健一著作集 補巻一
劍橋の學生生活 他
昭和五十六年五月二十日 第一刷印刷
昭和五十六年六月四日 第一刷發行
著者＝吉田健一
發行者＝堀内末男
發行所＝株式會社集英社
東京都千代田區一ッ橋二丁目五番地一〇號
電話＝東京（二三八）二八四二〈文藝出版部〉
東京（二三八）二七八一〈販賣部〉
整版所＝株式會社中臺整版
印刷所＝大文堂印刷株式會社
製本所＝株式會社石橋製本工場
©1981 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171031-3041 落丁本・乱丁本はおとりかえします

# 吉田健一著作集　補巻一　目次

劍橋の學生生活　九
ケンブリッヂの大學生　一五
英國のインテリゲンチヤ　三
英國の芝　三九
ウインザア公　四三
英國の敎師達　四九
英國の青年と自由　五五
英國の學生氣質　六一
英國人氣質　六五
英國の冬　七一
ロンドンの飲み屋　七五
＊
詩に就て　八七
舊刊案內　八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「無常といふこと」以後　九六
「俘虜記」の頃　九九
文學作品の飜譯　一〇二
歴史と時代小説　一〇五
石川淳「西游日錄」　一〇八
讀みもの　一一一
言葉に卽して考へる　一一四
小説の笑ひ　一一七
連歌　一二一
文章　一二四
言葉　一二七
現代詩に就て　一三三
＊
父の讀書　一四七

不思議な國のアリス　一五〇
私の讀書遍歷　一六〇
酒の飲み方に就て　一六四
海底旅行への誘ひ　一六六
結婚は戀愛の墓場だらうか　一七三
帝國海軍末期の二等水兵　一八〇
辻留　一八七
醉旅　一九二
むかしは靜かな町だつたが……　一九七
專門家　二〇〇
中學時代の藝術論　二〇三
政治と漫畫　二〇六
毛竝と育ちと　二一〇
年上の友　二一六

漫畫に就て　二一八
野蠻と文明に就て　二二二
好色　二二九
本のこと　二三八
アメリカ紀行　二四二
大デュウマの美食　二五〇
きだみのる氏のこと　二六一
餘暇　二六四
東京の町　二六七
古田さんのこと　二七三
戰爭中の生活　二八四
話にならないこと　二八七
お化けのこと　二九〇
東京　二九四

春　二九八
武田泰淳氏のこと　三〇二
春、又　三〇六
文庫と私　三一〇
政治　三一四
洋酒天國　三一七
犬その他　三一九
＊
過去　三二五
贅澤な話　三二八
解題　三八九

# 劍橋の學生生活他

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 劍橋の學生生活

劍橋に於る學生生活に就て書くのに先立つて、大學とコレッヂといふものとの關係に就て少し說明して置いた方がいいかも知れない。劍橋大學が何時出來たのかは知らないが、兎に角十二世紀に於ては既に其處の敎授連が組合を組織して、外的な壓迫に對して對抗出來る程度に勢力のあるものとなつて居た。その敎授達の宿泊所としてコレッヂが作られ、後に各コレッヂは若干の學生も收容することとなつた。さういふコレッヂは例外なく裕福な個人或は商業組合の寄附によつて、時を異にして創立されたものであり、各々固有の財產があり、各コレッヂはその會員たる敎授及び學生によつて、大體創立當時の規則に從つて、今猶組織され、支配されて居る。卽ちコレッヂは、大學一般の規則と矛盾しないことを條件とする自治團體であつて、大學はさういふコレッヂの漠然とした集團であり、各コレッヂの代表者によつて行政されて居るものと見ても、事實と餘り懸け離れて居ることはない。コレッヂは全部で十七あつて、その他に女學生のが二つ、コレッヂ擬ひのものが幾つかある。

それで學生は先づ、或るコレッヂの入學試驗を受け、及第すればそのコレッヂの保證の大學の入學

試驗を受ける。それがすめば同時に、コレッヂと大學との會員になる。つまり所謂劍橋の學生になる。併し實際は、全く自分のコレッヂの支配の下にあつて、大學は劍橋の町と同じ程廣く、曖昧なものにしか考へられない。例へば彼は、コレッヂの中に住むのでなければ、コレッヂの指定する下宿に住み、下宿の主人が彼に就て苦情がある時はコレッヂの學生監に訴へて出るのである。その他に下宿の主人は自分の所の學生が夜十二時以後に歸つて來た時は翌日か何か、それを學生監に屆け出なければならない。又學生が十時以後に外出する時も同じである。さういふことが一週間に三度以上あると、どうなるのか忘れたが、確か學生が學生監に呼び出されるのである。全然夜明しすれば大變なことになつたやうに記憶して居る。コレッヂの中に住んで居れば十時に門が締まつて、門では門番が見張つて居る。併し裏門のあるコレッヂもあつて、それを乘越えることはさ程難しくはない。下宿では窓から拔け出すことを防ぐ爲に、二枚硝子の下の方のが釘付になつて居たのを覺えて居る。併しこれは私の所だけであつたのかも知れない。それから學生は何時でも暗くなつてから後は、ガウンといふ黑羅紗のマントみたいなものを着て、四角い板の下に頭の入る所が出來て居る帽子を冠つて歩かなければならない。家の中に居る時はいいのである。併しコレッヂの食堂に於る晩餐には、コレッヂ外に下宿して居る學生も出席することになつて居て、其處ではガウンを着て食事しなければならなかつた。私の行つたのは石疊みの上に白木の儘古くなつた食卓が竝んで居て、壁を天井と同じ種類の木で張つた、チュウドル式の食堂であつた。それで何か歴史的な建築の積りで感じ入つて居たが、それが先世紀に新築されたものであることが後になつて解つた。七時過ぎだつたと思ふが、或る一定の時刻に學生が食堂に集つて、教授連が入つて來るのを待つて居た。さうするとベルが鳴つて、腰掛けて居た學生が一

齊に立ち上つた。それから食堂の戸があいて、コレッヂ長を先頭にした教授連がぞろぞろ入つて來た。併し學生とは違つて皆絹の、裾のあるマントを着けて居るので、食堂が教會のやうな感じにもなつた。教授の食卓は一番の奥の、少し高くなつた所にあつて、彼等が其處に上ると、誰だか、選拔された學生が、ラテン語で食事前の祈りを言つた。それが終ると又ベルが鳴つて皆席に就き、食事が始つた。相當御馳走であつたのを覺えて居る。兎に角、食堂に少くとも一週に五日は出席しなければならなかつたが、他の時外の料理屋で食事するのよりもコレッヂの方が旨かつた。飲みたければビイルも註文出來た。食事の間に名簿を持つた小使が入つて來て、食堂に出席して居るものの名前に印を付けて廻つた。其處に二百人は居たのであるから、考へて見れば、頭のいい小使である。

食事の後で祈りはなく、銘々勝手に、散り散りに食堂を出て行つた。勉强するものは自分の部屋に戻つたけれど、他のものは暇潰しに友達の部屋に集つた。劍橋は英國の田舍らしく娯樂設備に乏しいので、友達の部屋にでも行かなければ、夜は時のたたしやうがなかつた。尤も偶には、「嘆きの天使」などといふ映畫を見ることが出來た。それから「フェスティヴァル座」といふ相當有名な演劇團が、毎週出し物を變へて興行して居た。つまり一週間に一度は芝居に行けた譯である。劇場は何處だつたか、町の中心から割合に遠く、その劇場の先に一種の貧民窟があつた。廻りが寂しいので、出し物がいい時劇場の呈する活氣は、例へば樺太に帝劇がそのままそつくり出現したやうなものだつた。大學次長や幹部格の教授が劍橋の社交界の人々と連れ立つて來て居た。人が混み合つて居て、その中では都會に居るやうな感じにもなつた。

夜のことはその邊にして、朝は、本ばかり讀んでも居られないので講義を聽きに行つた。講師の大

多數は、學士號を有する各コレッヂの幹部會員で、大抵自分のコレッヂの講堂或は教室で講義して居たから、學生はコレッヂからコレッヂへと、講義を聽いて廻るのだつた。それにはかなり歩かなければならないので、學生は大抵自轉車を持つて居た。自轉車の前に籠を下げて、その中に本やノオトを載せて町の中を廻るのである。その點、中央に近いコレッヂに住んで居るものは幸だつた。さうすれば、有名なコレッヂは固まつて建つて居るので、歩いてでも廻れた。講義は大抵後で本になつて出るか、既に發表された著作を種にして居るので、本當は聞かないでもいいやうなものだつた。講師の話の巧みさに魅せられる、といふやうなことに結局はなる。大學の招請に應じて、倫敦の有名な劇作家が數回に亙つて演劇史を講じた時は、隨分逆上せさせられた。何百人だか知らないが、それのあつたコレッヂの大食堂は滿員續きで、椅子のない場所は立つて居る聽講者で埋まつて居た。建築のせゐなのか、聲が部屋の隅まで響き渡つて聞えた。マアロウの「フォオスタス」の最後の科白を朗誦したのを覺えて居る。劍橋では喝采する時、拍手する代りに足で地團太を踏む。鷗外のいふ trampeln である。一度はメエスフィイルドといふ桂冠詩人が大學の評議館でチョオサアの講義をした。さういふ、大學講師以外による特別講演には、大學の會員以外に、教授連の親類のやうなものも來て居るやうだつた。尤も、會員、——といふのは學生も含むのだが、——會員とさうでないものとの違ひは、さういふ場所では、ガウンを着て居るか居ないかにあるのだから、誰でもそれを一着借りて着て來れば怪まれずに入場出來るのである。それで思ひ出したけれど、大學やコレッヂに屬する建物は、他の町の建物とごつちやになつて居て、少くともその庭や中庭は、學生でないものも自由に出入り出來る。それにコレッヂの建物、殊に各コレッヂに屬する教會堂は大概は名物になつて居るので、アメリカ人の

見物人などがあり、大學と町との境目といふものは先づ存在しないのである。コレッヂの境内を通る方が早道の所は一般に利用されて居るし、庭のベンチに腰掛けて居ても咎められる譯ではない。しかしそれで町の住民が大して得して居るやうには見えなかつた。何か、大學の學生と町の者との間には、壓迫的な階級的差別があるやうに思はれた。

晝の食事は自分の部屋や下宿に戻つてするものが多かつた。コレッヂの食堂でもいい譯だが、さうすると高いので、町で買つたパンだのチイズだので我慢するのが普通らしかつた。金があるものはコレッヂの臺所から自分の部屋まで料理を持つて來させた。劍橋では、晩の食事はコレッヂの食堂でする關係から、晩餐に人を呼ぶことは餘りしないやうであつたけれど、晝飯には時々招待された。學生よりは教授の所に呼ばれて行く方が、料理も勿論よかつたし、來て居る人達の話も面白かつた。結局、あの種類の大學の重要さはさういふ付き合ひにあるのだと思ふ。資格獲得といふこと以外には、一流の知識者と共に生活出來るから牛津とか劍橋に行くのである。

さういふ晝飯の會は、先に歸る客はあつても、どうかすると、日が暮れる頃まで長引くことがあつた。主人の老教授は居殘つた二、三人の學生を連れて、町に散歩に出掛けたりした。少し先のコレッヂの教會堂にある古い色硝子の窓とか、或は博物館に特別陳列があつたりすると、それを教授は學生と一緒に見に行くのである。レンガ建築材に使つたポオトランド石は、古くなると黄色くなつて、それが夕日を受けると變に暖く輝き出す。見て居ると眠くなるやうなのである。町の十幾つかの教會は十五分たつ毎に、色々な鐘の音を打ち出した。どうにもかうにも、脇に柔和な、博學のおぢいさんが寂しくならないやうについて居て呉れる時、その邊の散歩は、クロオド・ロランの風景の中に平たく

ならずに入つたやうで、何か危機を手前に控へて絶對に安息して居る一時なのだつた。そのうちに夜になつて、食堂に出席する爲のガウンを取りに下宿に歸らなければならなかつた。劍橋では晝飯の會よりも、四時からのお茶の會の方がなほ多かつた。劍橋といへば其處のお茶の會を思ひ出すやうなものであるけれど、其處で何をしたかと言へば、結局ただ話をしたのである。女の人達と氣持よく學問の話が出來るのが珍しかつた。此の頃の劍橋に就ては知らない。



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com